

Fortune

■

「馬鹿な！ 我らの不始末を後世に押し付けるのか？！」

「では、どうする！ ダウゼント砲は焼け付き、あれを消し去る方法は無いのだ！」

「・・・そのためにガーランド宮を犠牲にするのか？」

「消え去るわけではない・・・それしか言えんのだ・・・」

「神官たちは何と？」

「このことを語り継ぎ、決して忘れぬように・・・と・・・」

「我々とて、他に方法があるなら教えて欲しいぐらいなのだ・・・」

・ 魔道大戦末期 苦悩する魔術師達

■

「オヌシノ・・・コト・・・ワスレヌ・・・ゾ」

「ワレラヲ・・・タオシタ・・・ト・・・オモウナ」

近隣の人々の命を奪ってきた2体1組の魔物。
その連携に苦戦するも、どうにか討伐は終わりそうだ。
ディスの最後の一撃で2体の魔物は剣に刺し貫かれた。

「イズレ・・・ワレラノコトラ・・・オモイダサセテヤル・・・」

「・・・ナンダイデモ・・・イツマデモ・・・ワスレルナ・・・」

「いちいち覚えていられるか・・・」

その時は、さして気にも留めなかったのだが・・・。

・ 161 年 南方にて 若き日のディス

■

「何があったの？ 精霊たちが怯えてる・・・」

「俺にはそういうのは見えんがな・・・この寒気は普通じゃないな」

「秤の印が先ほどから触れられないぐらいに熱く感じます」

「！！来る！ みんな逃げて！」

(猛烈な冷氣・・・海の精霊の力が暴走している)

「・・・おい、みんな無事か？！」

「何とか・・・でも、私たちの手には負えません・・・」

「ほら、突っ立ってないで、逃げるんだよ！」

「でも・・・精霊たちが・・・泣いてる・・・」

「自分が死んだら意味が無いぞ！」

・ 299 年 主無き精霊殿に冒険者が挑む

■

漆黒の槍が " 魔王 " と呼ばれた存在を貫く

その姿は揺らめき始め、全身から人々の魂が解放されていく

「今回は・・・我らの負けを認めよう

・・・だが、次は・・・次こそは・・・」

勇者の手に力がこもる

「その時は・・・この槍がまたお前を貫くだろうさ・・・」

凄まじい咆哮と共に、禍々しい気が霧散していく

「・・・今は・・・まだ無理か・・・」

最愛の伴侶を失った彼に、仲間達もかける言葉を見つけられなかった

・ 320 年 ガーランドと呼ばれる地で

■

静寂が玉座の周りを包む。そこへ、一人の騎士が謁見に訪れた。

「陛下、吉報でございます」

「む・・・？ もしや、ドワーフたちと・・・？」

「御意でございます。魔を断ち切る剣を鍛える約束を取り付けました」

どよめく広間の人々。遂に切り札が手に入るかもしれない。

「ただ、それだけの力を持つ剣となると、持ち主を相当に選ぶだろう
と申しておりました」

「構わぬ。剣があれば、それを操る者も現れよう。我が国にも勇士は多い。
だがどんなに勇士がいても、使う武器が無ければ意味が無いのだ」

「それでは剣の鍛錬を依頼いたします」

「必要なものがあるなら、幾らでも揃える。頼んだぞ」

・ 404 年 オッフレング王国 王城

■

「・・・ゼール！早くその場を離れろ！」

敬称を呼ぶことすら忘れて叫ぶ コルフティカ。

「これ以上、この中に入って帰ってこれない者を増やしてどうする！
だが、誰かが抑えなければ封印は完成しない！」

魔族を封じる封印の只中で、魔族たちの力を押さえつけるゼール王。

「いいか！この封印の鍵、絶対に守り抜け！手段は選ぶな。
今この封印が解けたら、取り返しが付かない！」
「ゼール！・・・あなた！」
「エーリア、済まん。鍵のこと、お前に任せる！」
「・・・分かったわ・・・」

集まった " 生ける盾 " の人々にも、国王は叫ぶ。

「いずれ、この封印は解ける。その時まで備えを怠るな！
その時リグナーデの導きがあるのなら、また共に戦おう」

それがゼール王の最期の言葉となった。

・ 410 年 西方辺境の地で ゼール最期の時

■

「將軍閣下、これ以上はお断りできないと思うのですが・・・」
「・・・だが、將軍と選王を兼任など、前例が無いぞ」
「これまで必要が無かったただけだ。ここは引き受けてくれ」

配下の侍が慌てた様子で入ってくる

「大変です！エルフが・・・黒のエルフが！」
「なんと！？」

「このたびの選王 ご就任、お祝いを申し上げます。
早速で申し訳ないのですが、ご相談いただきたいことがございます」
「・・・ここまで根回しをしていたとはな・・・」

しかし、現実にニスティアートのエルフが、人の前に姿を現すのは
紛れも無く緊急事態なのである。

・ 428 年 中央イリュメン シンカイ家の屋敷

■

「お前たち！自分が何をやっているのか分かっているのか？」
「そっくり、その言葉は返してやる。
考えてもみろ、こんなことに何の意味がある？」

そんな話し合いをしているところに、更に別の一隊が入ってくる
だが、どの兵も目が虚ろで、まともな状態とは思えない

「見ろ！こいつらが本当に我が帝国の兵といえるか？」
「・・・む・・・これは確かにおかしい。何が起きている？」

虚ろな目の兵たちは、問答無用でこちらに切りかかってきた

「彼らとて、我らが同胞のはず・・・
ここで斬り合うのは得策ではないな」
「ああ・・・こんなことを企んだ奴こそ、討つべき相手だ」
「この兵たちは・・・デファナート様の直属？！」
「・・・まさか・・・」

・434年 南方アンフェナで帝国軍が相討つ

■

「皆...皆、死んでしまった！
これ以上、好きにさせるわけにはいかない！」

激しい息遣い...たった独りとはいえ、彼女も黒影衆の一員。
手に持つは、切り札の神槍。その双肩には人々の想い。
かつての主君に切っ先を向けて、深紅に染まった広間に立つ。

「お前にできるかな？」

ほくそ笑む"魔"

「当然だ！そのために我等は生きてきたのだから！
黒影が剣リアーナ、この槍の名の下に、貴様を討つ！」

・435年 帝都シリラム・ティトセラ 血臭漂う玉座で

■

眼前で近衛兵が次々に倒されていく

「・・・お前が最後か」

男性にも女性にも見えるその魔族が冷笑を向け、その手を国王に向ける

「頼む！ここで・・・ここで使えなければ、どこで使うというのだ！！」

魔族の手から放たれる一撃・・・とっさに沈黙する剣で己が身を庇う
その時・・・鞘からも漏れ出るほどの光を剣が発した
魔族の力にさらされて、自身の使命を知ったのだろうか？

「おお！これこそ、我がオッフレング家を守る光だ！」

光放つ剣は、遂に鞘から引き抜かれた
光に戸惑いを見せた魔族の隙を突き、その刃は深々と魔族の体に埋まる

・438年 鞘から抜けぬままの神剣を片手に

■

「將軍！哨戒の船が！」

「私にも見えている！相当の相手のようだな！」

白い水しぶきを激しく上げ、海上を滑るように移動する影

「全兵に告げる！

敵はたった一体。しかし手加減をする余地は無い相手だ。

我等の国と民を守るため、魂を賭けてこれ以上の前進を許すな！

全軍、刀を抜け！弓を構えろ！」

激しい戦い・・・犠牲は少なくなかった
だが、ガーランドの国土は侍達により見事に守られた

・480年 イリュメン近郊の海岸 護国兵団が待ち構える

■

「へ・・・陛下！一体何をなさるのです！」

「誰か！薬師を呼べ！・・・いや、ラノスの神官だ！」

だが流れる血の量は、既に手の施しようがないことをありありと示す

「・・・良い・・・のだ・・・。どのみ・・・ち・・・老い先・・・短い・・・身・・・
こ・・・これで・・・世界が・・・救われ・・・るのな・・・ら・・・」

みるみる力を失っていく腕・・・

しかし、目を見開き、最後の力を振り絞って彼は願う

「神々よ！槍よ！

・・・我が魂・・・に賭けて・・・今一度、我等・・・に力・・・を！

希望を・・・」

魂を振り絞った言葉に、神槍は目覚め、力を取り戻していく

だが、老王がそれを見届けることは叶わなかった・・・。

・480年 自らを"槍"で貫き

■

「馬鹿な！なぜ私などをかばった？」

「・・・俺は・・・お前たち・・・ゼールの・・・連中を・・・絶対に許さねえ」

「・・・」

「・・・だがな・・・魔族は・・・魔族は・・・もっと許せねえ・・・」

「！」

「今はな・・・手負い2人より・・・腕のいい・・・お前が無事な方がいい・・・それだけだ・・・」

「・・・いや・・・だが・・・」

「いいか！！・・・お前は・・・このあたりの魔族を全部倒せ・・・そして・・・死ね・・・」

「・・・心得た」

「・・・・・・・・・・」

「・・・リグナーデよ、この者の魂を導きたまえ・・・」

・491年 アフィシヤス近郊 名も知れぬ 剣爵と 鋼の騎士は語る

■

剣を返しに来た、という若者を兵達に取り囲む

「おいおい、待ってくれよ。別に盗んだわけじゃない。

今、話した通りだ。本当に王子に渡されたんだ」

だが、その剣を知る者は、そんな若者を

どのように扱えばいいのか、いまだ分りかねていた。

「鞘は申し訳ないが、見つからなかった。

それは詫びなければいけないと思うんだが・・・」

それを聞いた兵たちは、さらに息を飲んで、動けなくなった。

「！！・・・ワレムだ。間違いない・・・しかし、どういうことだ？！」

オッフレング王家が断絶した今、抜き身で持てる人物はいない

・・・はずの剣なのだ。

・501年 主なきオッフレング城

■

「くそっ！どこに被害を報告すればいいんだ！」

「行政府はどうなったんだ？」

「今見に行けば分かる！ただの瓦礫の山だかな・・・」

「なんてことだ・・・街が・・・壊滅じゃないか」

突如、地下から浮き上がった巨大な円盤・・・。

その影の下は、つい昨日までは北方でも最大級の都市だった。

だが、今はただの瓦礫の山に過ぎない。

そこかしこから助けを求める声が溢れている。

「とにかく手が空いた者でなんとかするしか無い。

エレンヴァースと・・・ヴィシュに伝令を出すんだ」

「エレンヴァースはともかくヴィシュにもか・・・？」

ヴィシュ家のことをよく思っている者は北方にはあまりいない。

だが救援物資を一番最初に届けたのはヴィシュの者だった。

しかも、それは無償で提供されたのである。

・ 504 年 北方で上も下も無い大騒ぎ・・・